

[制作記録]

日本画を学ぶ学生の「黒板アート」制作記録

Records that Students Studying Japanese Painting Produced Blackboard Art

荒木 恵信
ARAKI Keishin

初めての黒板アートをはじめる

本稿では、日本画を学ぶ学生が初めて取り組んだ「黒板アートプロジェクト」の模索と実践から掴んだ黒板アートのひとつのあり方を報告する。

本年度の初め、本学産学連携センターから日本画を学ぶ学生に、人の集まる公共の場で黒板アートをして欲しいという依頼があった¹。日本画制作で学んだ芸術的感覚、知識や技術を日本画制作とは異なる手段で発揮し、美術の楽しみを社会へ伝えられる好機である。参加する学生には貴重な体験となるだろうし、他の学生にも体験談を聞いたり作品鑑賞をしたりと楽しみがある。何より、普段、写生場所の提供などでお世話になっている地域の方々に、制作過程や作品をみていただいて、少しでも恩返しができるれば幸いと考え、依頼を引き受けた。

ただ、大きな問題は、黒板アートの経験を学生も筆者も持たないことであった。誰でも黒板にチョークで落描きをした経験はあるだろう。しかしそれを「アート」にまで昇華させるにはどのようにするべきなのか。

使用する黒板は、金沢市立材木町小学校の児童たちが毎日使っていたものである。1面の大きさは、縦1.2m×横3.6m。これを横方向に3面並べて画面とする。横幅10mに及ぶ迫力の大画面でありながら、懐かしさが自然と込められてくる、温かみを感じられる独特の基底材である。これらは金沢駅地下広場に設置され、ここで平成30年9月10日(月)～16日(日)まで公開制作し、17日(月)～24日(月)にかけて展示したのである。

チームリーダー 大学院1年 戸田 伸英
大学院2年 塩崎 泰介
大学院1年 大山 和輝
中田日菜子
中村 優

アートに昇華、そして締めくくり

テーマは、チームによって「海の中の宇宙(そら)」に決定した。海中に見立てた大画面に、日本海を泳ぐ大小様々な魚やカメなどを描くのである。構想が決まったら、制作の基本として取材や写生のために水族館へ出かけているのが画学生として頼もしい。

普段使用している日本画の絵具は、鉱石や貝殻を粉砕した砂状のものである。これに接着剤と水を混ぜて画面に定着させる。チョークも乳鉢で擦れば粉状である。水で溶けば普段使っている絵具と大差ない。それならばと、様々な技法が考えられた。本稿後半の画像ページをご覧ください。

初めての黒板アートは立派に完成した。展示発表を通して制作の歓喜を大勢と共有した。そして最終日。あっけないくらいに簡単に消し去られた。この充実感と喪失感が黒板アートの神髄なのか。まるで大輪の花火のような夏の思い出となった。

註

1 本プロジェクトは、平成30年度 金沢美術工芸大学産学連携研究事業「みんなの思い出黒板アート」である。

(あらかき・けいしん 日本画専攻/文化財保存学)
(2018年11月7日 受理)



1. 海中を表現するために緑地の黒板全面に青色のチョークを塗る。



2. 青色の粉状のチョークに水を加え、よくかき混ぜて青色の絵具を作る。



3. 「2」の絵具をローラーで塗る。これによって水中の奥行きを表現する。



4. プロジェクターを使って下図を黒板に投影し、図様のあたりをつける。



5. あたりを頼りに図様を描く。水中の奥行き表現が出来ているので、魚が手前を泳いでいるように見える。



6. 時々画面から離れて構図や色彩のバランスを確認しながら描き進める。



7. チョークのハッチングを指で押さえて、グラデーションや奥行きを表現する。魚の質感も表される。



8. 青色をぬぐい去り、エッジを際立たせる。モチーフの形や前後関係を明確にする。



9. 魚影の表現。手前の魚の向こうに緑地を利用した魚の陰がある。海の深さと広がりを感じさせる



10. 様々なモチーフで画面が埋まってきた。魚の前後関係、泳ぐ方向の微調整をする。



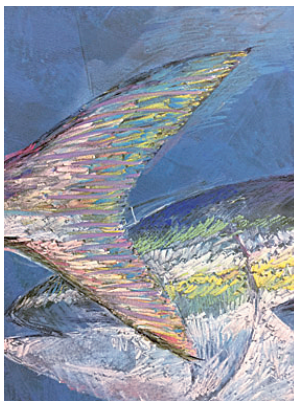
11. 画面中央 ブリのための習作。色調やチョークのタッチの加減を吟味する。



12. ブリの胴体のハイライトとなる白色は、チョークの粉を水で練って盛り上げる。



13. ブリの胴体。色調やタッチの変化で生命感をも表現する。



14. ブリの尾。色彩の美しさと同時に力強い泳ぎを感じさせる。



15. ブリの制作の様子1 ハッチングを重ねてボリュームをだす。



16. ブリの制作の様子2 資料を参考にしてそれぞれの魚の特徴を捉える。



17. サバの制作 サバは新鮮な青さが重要。生き活きと勢いのある前進感が生まれる。



18. 完成したサバ ハイライトの白色と青い縞模様が美しい。



19. トビウオの制作 下塗りの紫色や白色、黒板の地色を使い分けられている。



20. 完成したトビウオ 羽根の透明感、背の曲線、深い群青色がトビウオらしさを感じさせる。



21. メバルの制作 あたりの描線を基に下塗りが施された状態。



22. 完成したメバル 下塗りを活かしながら美しい色調を作り出した。



23. ウミガメの制作 あたりの白色の描線。甲羅と頭はあるが、脚などはまだ決めかねている。



24. 完成したウミガメ 頭のもたげ方や泳ぐ前脚の配置、色調も絶妙である。



25. 甘エビの制作 体軀は小さいながらも橙色が画面全体に華飾する効果をもたらす。



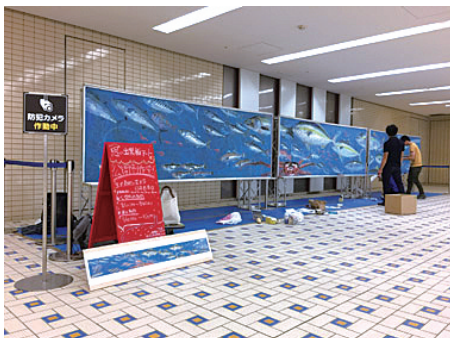
26. 甘エビの完成 思い思いに跳ね回る様子が表現されている。甲殻の艶も感じられる。



27. ハタハタの制作 4尾が単調にならないように下塗りを工夫する。



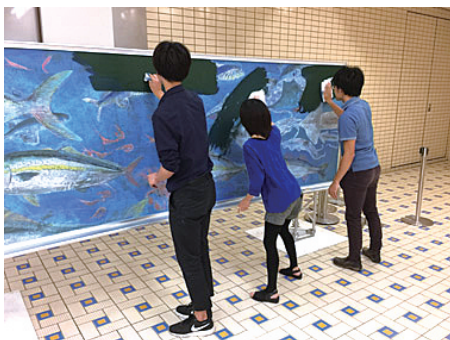
28. ハタハタの完成 目がそれぞれの性格を表しているようでユーモラスである。



29. 公開制作中の様子 赤い立て札にはプロジェクトの内容が記載されている。手前にあるのは小下図。



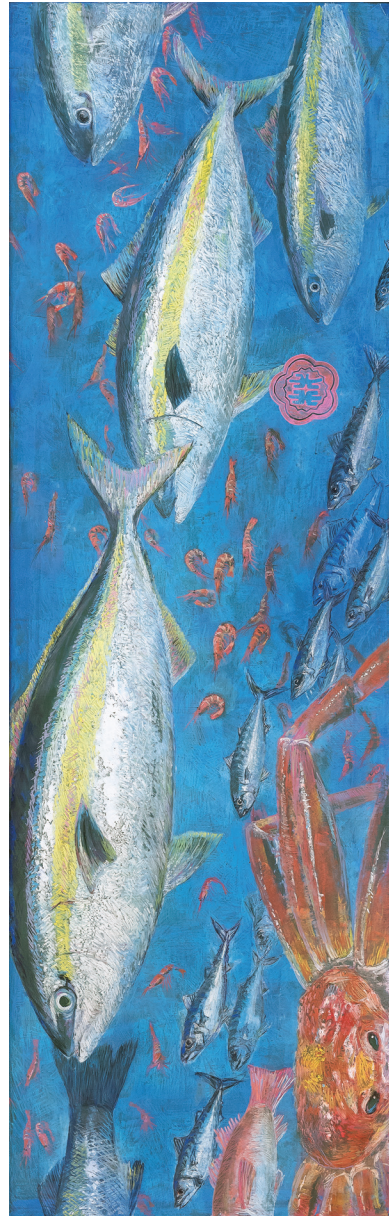
30. 公開プレゼンテーションの様子 9月17日に実施。SNSやテレビ、新聞など各メディアで紹介された。



31. 黒板アートを消す様子。濡れた布で画面を拭くと海中が黒板の面に戻る。



32. 全て消されて制作前の状態になった。この潔さも黒板アートの魅力である。



平成30年度 みんなの思い出黒板アート事業 作品「海の中の宇宙(そら)」